



平成24年7月23日
内閣府（防災担当）

首都直下地震モデル検討会（第3回）議事概要について

1. 第3回検討会の概要

日時：平成24年6月29日（金）13:00～15:00

場所：中央合同庁舎5号館 防災A会議室

出席者：阿部座長、岩田、大原、岡村、武村、平田、福和、翠川、山崎の各検討会委員、原田政策統括官、佐々木官房審議官 他

2. 議事概要

首都直下地震モデル検討会で検討対象とする地震について、高橋グループリーダー（独立行政法人海洋研究開発機構）、岩淵海洋情報課長（海上保安庁）、平田委員、事務局から説明を聴取し、委員間で議論を行った。今回の議事の概要は次のとおり。

- 房総沖ではフィリピン海プレートの境界はトラフ軸よりも北側に入り込む形、相模湾では、横ずれの断層を示唆するような構造しか確認できなかったが、特に厚い堆積物が観測されていることから、基盤深度はかなり南側で深くなっているだろう。推察すると、現在の北西方向の沈み込みを反映した構造になっているのではないかと。そこで、沈み込み方向の断面で考えると、元禄関東地震というものは沈み込み口に近い部分の津波地震のエリアまで連動発生したと解釈することが可能なのではないかと。しかし、大正関東地震と元禄関東地震の違いをきちんと検証することが必要。
- 相模トラフ軸の東の大東海脚の部分はどういうところがプレート境界なのかははっきりしない。
- 1677年延宝房総地震と元禄関東地震の部分は、どちらかというとは排他的に分布しているように見える。1677年延宝房総地震が3枚のプレートのどこで破壊したか知る必要がある。
- 沈み込むプレートの構造が普通の沈み込みと違うところで、どのような影響が出ているのかははっきりさせる必要がある。
- 東北地方太平洋沖地震発生以後、銚子付近から南東に傾く線状の地震の分布が見られるが、1677年延宝房総地震と元禄関東地震の間に向かってつながっているようにも見える。その部分を確認するためには地殻変動や地殻活動のモニタリングが今後必要になると考えている。
- 堆積物のない海溝の場合には、海溝軸と、沈み込み境界と、それから変形の前縁というものが一致するが、相模トラフは比高差が9,000mもあるとともに、斜面崩壊と堆積と浸食の繰り返しをしているため、非常に過去の変動の痕跡が消されてわかりにくい。
- プレート境界は物質境界と力学境界を分けて考える必要がある。今回の検討においては津波を起こす、つまり海底が動く前縁、力学境界の前縁を連ねた線を設定することが目的であり、この場合には変形をどれだけ認識できるかが重要になる。

